

# 言葉との邂逅

『禅と日本文化』 鈴木大拙 岩波書店

## 無明と業は、知性に無条件に 屈服するところから起こる

二一世紀、世界の宗教は、どこに向かうのか。

数千年の歳月を経て、未だ世界の各地で宗教同士が争う姿を見るとき、我々の心には、その切なる問いが浮かぶ。

そして、その問いを心に抱き、一冊の本を読むとき、日本において独自の開花を遂げた一つの宗教が、世界の宗教の未来を先取りしていることに、気がつく。

『禅と日本文化』  
大拙がこの書によって語っているのは、単なる文化論ではない。そこに描かれているのは、まさに禅の精神の精髓であり、この国の文化の根底に、どれほど深く、その精神が浸透しているかの証左である。

もとより、宗教が、宗教として語られている社会は、まだ真

に成熟した社会とは呼べない。

宗教的な精神性が、生活と文化の隅々にまで浸透し、人々が、宗教の存在を意識しなくなったとき、宗教は、その本来の目的を達する。二一世紀の宗教の条件は、その逆説を体现することであろう。

それゆえ、二一世紀の宗教の第一の条件は、「文化への昇華」。

この国において人々が日常使う「縁」「一期一会」「有り難い」といった言葉に、どれほど深い精神性が存するか、我々は、知らねばならない。

そして、禅において、日常生活に一体化された「常住坐臥禅」の精神が語られる意味を、我々は、解さねばならない。

第二の条件は、「万教帰一」。

かつて、オルダス・ハクスリー

が、その著書『永遠の哲学』の中で、世界の様々な宗教を並び論じ、すべての宗教の根底には、同一の思想が存在していることを語っている。

禅は、その意味で、いかなる宗派にも囚われない。なぜなら、禅において最も大切にされるのは、知識でも、知性でもなく、体験であり、直覚だからである。そして、本来、真の宗教は、すべて、体験を通じてのみ得られる、直覚の大切さを語っている。

それゆえ、冒頭の言葉。禅にとつて、様々な宗派が語る

教義の違いは、いざれ知性の無明。教義を言葉で語らんとすることは、そもそも宗教からの逸脱。「不立文字」という言葉は、その機微を教えている。

そして、第三の条件は、「権威



の否定」。真の宗教は、権威への依存を戒める。特に、宗教的権威への依存は、最も恐ろしい陥穽。人間にとつて、神仏を背後に担ぐことは、権威を纏いたいと願う小我の、最も密やかで、最も抗い難い誘惑となる。

それゆえ、禅においては、その陥穽を、一瞬耳を疑うばかりの、過激な言葉で戒める。

「仏に会いては、仏を殺せ」

この言葉の真意を掴むとき、我々は、大地に自らの足で立つ自身の姿を見出す。



田坂広志  
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

# BOOK